

2 第二次 = 今までの学習方式による実験

昭和31年4月入学の一年生に対する指導

(1) ふたたび、一年生の子供たち

第一次の子供たちを、私は六年生まで担任したいと思っていました。しかし、先に述べたように、もう一度一年生から、今度は普通のやり方をやってみなければ、実験として不完全だ、と考えるようになったことと、子供たちを三年も続けて指導すると、私の持つあらゆる性質が驚くほど子供たちにうつることに気がついたことにより、三年を終った所で、この子供たちと別れようと決心しました。初めて持った幼い子供たち、三年間精魂をこめて指導して来た子供たち、正直に言って我が子よりも多くの時間をかけてその成長を見守って来た子供たち、それは、私の実験とは別にして、私にとって無比の宝のようなかわいい子供たちでした。

しかし、恋しくなる気持を断って、昭和31年4月から、新しい一年生を担任することになりました。学年はやはり四学級編成で、その編成の仕方も、第一次の場合とまったく同じでした。在籍児童数も、やはり同じくらいで53名でした。従って、第一次と第二次と、児童に関するかぎりまったく条件は同じであるとみてさしつかえないと思います。

その他の条件においては異なっている点が大きく二つありました。その一つは、第一次にあった二部授業が第二次では解消され、規定通りの時間数の授業ができたことです。その二つは、学校全体の指導計画として、この年「漢字練習の時間」を特に設けたことで

す。それは一週間に三日、第一時間目の授業の始まる前の十分間を、漢字を書く練習をする時間に当てたものです。これは、全職員が「漢字を書く能力は、あらゆる学習を行うための基礎能力である」ことを認めて、全員一致の意見として、正規の授業時数の上に、これを追加したものでした。

この二つは、いずれも大きな影響を持つ条件と考えられますが、二つとも第二次に有利になっています。そしてその他には、条件において差異があると認められるものはまったくありませんでした。従って、第一次と第二次と、同じ私が指導する以上、第二次の方が、第一次より相当に良い成績を収めるのが当然であると言える情勢において行われたわけです。

(2) 指導の方法と実際

第二次の実験の目的は、方法としては一般のやり方通りに指導することにありましたので、教科書通りに、教科書に従って指導を進めて行きました。つまり、漢字の学習は、一通りひらがなの学習がすんでから始められたわけです。漢字の指導は、教科書に提出される漢字についてだけ行うのですが、その漢字の指導は、第一次の時に効果的だったと思われるやり方を取り入れて指導しました。

また、斌一次の時に比べると、国語の授業時数も倍になって規定通りになったばかりか、「漢字練習の時間」まで特別に設けられていましたので、漢字についての解説指導や、漢字の読み書き練習も、第一次の時よりも十分に行えたわけです。

しかし、ここに注意しなければならないことは、教科書に提出され

る漢字は、一年生の学習生活にあまり使用される機会のないような漢字が多いということです。具体的に例を挙げて言うならば、「山」や「川」が一年生の教科書に提出されていて、これを学習しても、これを一年生の日常生活の上で使用する機会は作りにくいのです。ですから、国語学習として、その特則に練習するだけです。ところが、「学校」「先生」「何時何分」というような、一年生の生活に必要な、そして提示に多く使用する機会を持つ漢字だったら、国語学習外に毎日でも、子供たちに読む機会を与えることができますが、そういう漢字は一年生の教科書に提出されていないのです。

つまり、第二次では、国語学習として漢字の読み書きを練習する時間は第一次よりずっと多かった、しかし、第二次では、学校における全学習の上からは、漢字を読み書きする機会は第一次より少なかった、ということになるのです。

次の項に示されるように、第二次の結果は第一次よりずっと劣っています。授業時数が二倍にも増えているのに、漢字の習得字数は逆に半分にも足りませんでした。しかし、よく考えてみれば当然のことばかりです。

30 や 40 ばかりの漢字では、それも、先に述べたように「山」や「川」のような漢字では、実生活の上で使用する機会が少ないので、学習した時には習得したようでも、これでは忘れ去るばかりです。第一次では、国語学習の時間としては、漢字の読み書き練習の時間はわずかしかなかったが、実生活の上でどんどん使用できたから、漢字が自然と習得できたのです。第一次に、正規の時間こそ少なかったが、実際に学習する時間は多かったとすることができます。

ましよう。第一次の成績の良かった理由はこんな所にもあったと、言うことができます(理由は他にまだまだありますが、それは後に譲ります)。

(3) 指導の結果の調査

この指導は、一般の教科書に提出されている漢字を、一般に行われているように提出し、指導しましたので、一年間に50字にも足りない漢字しか提出しませんでした。従って、この学年の間には調査をしないで、第二学年になってから、その第一学期の終りに近い昭和32年7月18日に、それまでに提出し指導した漢字を、ちょうど百字選んで、それについて調査しました。

この調査が、昭和32年7月18日に行ったもので、一年四か月間に学習した漢字百字を、第一次の第二回・第三回と同じ方法により調査したものです。調査人員は在籍児童の全員で53名でした。

学級の習得率は79%で、よい成績とは言えませんが、決して悪い成績ではありません。しかし、第一次の場合と比較してみると、明瞭な差異があることがわかります。数字に大変な違いがあるのですが、真に問題となる差異は、実は別の所にあるのです。それは重要な問題ですので、項を改めて述べたいと思います。

<表4>	
1.	98字
2.	96 "
2.	96 "
2.	96 "
5.	95 "
(中略)	
49.	48字
50.	45 "
51.	23 "
52.	18 "
53.	7 "
平均	79字